

「八甲田山雪中機動演習」余話

『偕行』が繋ぐ縁

平川 満 陸士60

編集委員（杉本） 本稿は、昨年末、『偕行』に掲載された拙稿「野戦特科の将来」を読まれた陸士出身92歳の方が、偕行社へ感想をお送りくださった。編集委員になって初の駐屯地シリーズの執筆だったので、大いに感激した。

感想文は、陸士60期（航空）の平川氏。昭和30年自衛隊入隊で特科を選び、北熊本8特連で中隊長、仙台2特群で大隊長、岩手9特連で連隊長を歴任され、昭和54年退官された。

全く面識のない方からの突然のお手紙に、「あなたの『駐屯地訪問記事』に触発され、現職時のことを思い出し筆を取りました」とあり、平川氏が第9師団第2部長時代の体験記を、生涯忘れえない思い出として同封していました。

体験記は、陸士60期予科12中隊7区隊会報に発表した内容だが、偕行の縁が取り持つもので、平川氏のこころを、得て、転載させていた。だ。

雪を降らせろ！

私達が使っていた軍歌集「雄叫」の

中に掲載されている「陸奥の吹雪」（作詞・落合直文）の冒頭には、次のような説明がなされている。

「明治35年1月23日、青森第五聯隊第二大隊の古兵からなる二一一名が山口少佐指揮のもとに八甲田山の田代温泉に向かったが、零下20度の猛吹雪のうちには25日から26日にかけて大半が凍死した。寒冷地作戦研究のための尊い犠牲であった」と。

この雪中行軍事故は、日露戦争前後というべき当時の朝野を揺るがす大事件として広く報道されたものだが、それから70年も経った昭和40年代ともなると、地元青森以外では全く忘れ去られたものになっていた。

それが歴史のひとつコマとして再認識されたのは、昭和49年新田次郎著『八甲田山死の彷徨』が出版されてからである。この小説が発売されるや爆発的な反響を呼び忽ちベストセラーとなった。更に追いつきをかけるように、これが映画化（高倉健主演）されると、衝撃と感動は倍加され人々は今更ながらに寒冷地気象の恐怖に身震いするとともに、当時の陸軍の冬期装備の貧弱さ、果ては指揮官の状況判断や指揮統率のあり方についても辛らつな批判を展開したものだ。

「八甲田山死の彷徨」が世に出てくると2年前の昭和47年1月自衛隊第9師

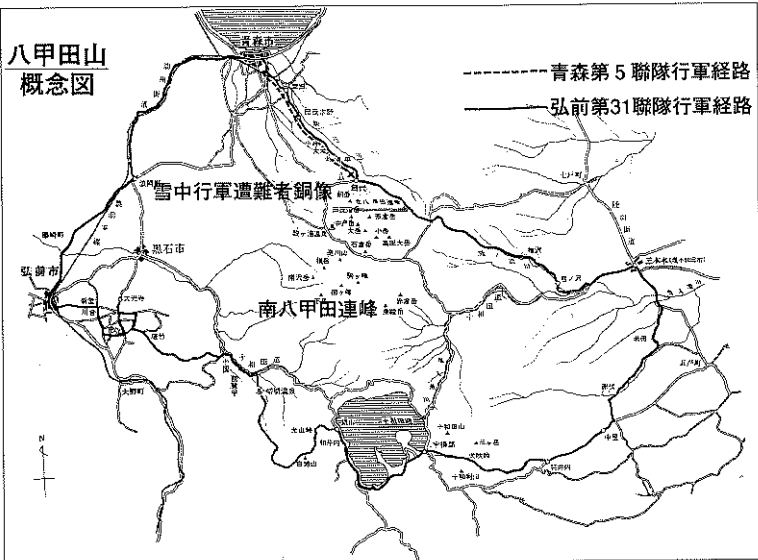
団（青森市）は、この年が明治35年1月（1902年）に起きた八甲田山遭難事件から数えて丁度70周年に当たることから、これを記念して八甲田山雪中機動演習を実施することになった。

この演習が意図していたものは、旧5聯隊が試み失敗に終わった青森市側から八甲田山東麓の田代平を越えて南の三本木（現十和田市）方面への地上ルート確保が可能なかどうか、それを現自衛隊の寒冷地用装備と部隊練度をもって試してみることだった。

統裁官は師団長。実施部隊は第5普通科連隊の1個中隊基幹。時期…1月中旬。経路…旧5聯隊と同じ。装備…現自衛隊装備（旧5聯隊との違いは全員がスキー携行。無線機を装備。天幕、食料、炊飯用具等重量物はアキオにて曳行など）。ただし出発の時期は、1月16日早朝と決定された。旧5聯隊の出发は1月23日であったが、これに比べると1週間も早い。これは、1月20日から月末にかけての八甲田山は荒れ狂う吹雪の時期、青森の人にとって魔の山として最も恐れられており、誰一人として山に入る者はいない。敢えてその時期に挑戦するのは旧5聯隊の二の舞をしないとも限らない。その危険を避けるための安全策であった。

当時、私は第9師団第2部長（情報幕僚）というポストにいた。

八甲田山 概念図



この演習における第2部長の仕事は、八甲田山の地誌、気象や周辺住民の民情等を事前に調査し、部隊の計画、行動を支援することであった。

本格的な準備は前の年の夏から着手した。旧5聯隊が挑戦し失敗した青森コース、旧弘前31聯隊が試み成功した弘前市〜和田湖〜八甲田のコースの全行程を歩き確認した。しかし、肝心

の八甲田現地の1月〜2月の局地気象、積雪量等の細部データは、現地観測施設がなかったため殆ど皆無と言っ

てよかった。気象台、地元住民からの聞き取りなど出来るだけの努力をしてみたが、芳しいものは得られず推測に頼らざるをえない部分が多かった。

また当時自衛隊が保有していた当該事件に関する記録資料も、その経過の概要を大雑把に説明したものでしかなかった。内容的には、遭難の原因は、未曾有の寒波の襲来で、不運にもその直撃を受けやむを得ないものであったこと。そしてその大きな犠牲、その死は軍人精神の発露としてむしろ美化され賞賛されているものであった。また後年、数少ない生存者から聴取した体験談も内容的にはかなり押さえたものになっていった。日露戦争を意識していた当時の軍当局の秘密保持、兵士の士気の低下を恐れた苦心の跡が窺えるものであり、新田次郎の小説のように、微に入り細にわたった事の成り行き、現場の

悲惨さを赤裸々に綴ったものではなかった。

新田氏の本が小説であったとしても、それがもう数年早く出版され我々の目にも触れていたならば、自衛隊側の諸般の準備も、心構えもかなり違っ

たものになり、更に慎重を期したのも

になっていただろうと思うのである。

秋の深まる10月から11月にかけては、雪中での行進路をどのように正しく確保するかということに力を入れた。行進経路上にある大木の枝には雪が降っても埋まらないよう高さ5mから7m付近に長さ1mくらいの赤や青のビニールテープをしっかりと結び付け道路標識にした。また、現地での局地気象の把握、通信の確保のため、交通が途絶する前に無線機を持った隊員を八甲田山中の田代温泉に先行させ司令部との交信を確保していた。

部隊の訓練、統裁部の準備は、まず演習部隊の安全を第一優先、そして「危急時の対応を万全に」をモットーに、師団全力を挙げて周到・綿密に進められていった。

演習実施の部隊は、旧5聯隊と番号も同じ第5普通科連隊。旧5聯隊の伝統を受け継ぎ青森市民が特別の愛着を抱いている精鋭部隊である。そして今回の拳が発表されると、単なる自衛隊の演習としてではなく、70年前空しく

非業の死を遂げた先輩将士への弔い合戦として青森市民の関心と呼んだ。

この演習に対しては、マスコミもまた敏感に反応した。地元は勿論、東京の報道各社（新聞、テレビ）などが現地取材を申し出て、師団広報室はその対応に追われていた。

青森の雪は、通常12月初めには根雪になり、クリスマス頃の頃はスキージーズンが到来する。八甲田道は年末から4月にわたって交通が途絶する。

暦は昭和47年を刻み始めた。しかしどういうわけか、この年は正月になっても雪が降らない。ドカ雪が降ればいっぺんに解決するよ、などと楽観的なことを言っていたが、15日が迫るにつれてそのうちに、「期日を1週間早めたことが間違いではなかったらうか」という疑問や焦りが募ってきた。

当時の自衛隊でやっていた気象情報の把握は、1日2回程流されるNHKラジオ第2から全国各地の気圧配置を聞き取り、それを基に担当者が気象図を作るという極めて初歩的なもので、時間的なズレも大きかった。今日のよ

うなテレビ・ラジオによる大変分かり易いアップトゥデート（最新）の天気予報とは雲泥の差があった。

実施日の1月16日が近まるにつれて統裁部、実施部隊、支援部隊、見学者、報道関係者も逐次集まり動き始め

た。ますます心穏やかに済まされなくなってきた。

いよいよ明日が本番という1月15日朝、成人の日である。雪は全く積もっていない。降る気配さえ見せない。私はジープに乗り、八甲田山の現地偵察を行った。遭難現場付近(馬立場の後藤伍長の銅像付近)の道路では車の後ろを砂埃が舞う状況である。山頂からの眺望は、眼下に青森湾が静かに横たわり、雲外に広がる日本海、そして北海道の山々にも雪を予測させるような兆しは全く見られなかった。

正午前、重い足取りで師団長室に入り状況を報告した。師団長の落胆の様子がありありと窺え気が滅入った。しばらく沈黙が続いていたが、いつもは温厚な物言いとされる斉藤師団長が、キツと顔を引き締めて「2部長：雪を降らせるー雪を降らせるのは君の仕事だぞ。なんとかしろー」。統裁官のイライラも極限状態にあつたようである。「そんな無茶な??」と云える雰囲気では勿論なかった。

その真剣な眼差しに気圧されて「はい」と返事をしてしまふ部屋から退出した。

いかんせん、いかんせん。残り時間はもう20時間を切っている。「人事を尽くして天命を待つ」。しからば、どうすればよいのか。具体的な対策なん

て何も浮かんでこない。こうなったら腹を括ることだ。最後は、潜在的な自己の霊的な能力を信頼し期待して、一か八かの賭けに出るしかないだろう。そう決心し、独り司令部の屋上に上った。降りそうもない空に向かって、ただ必死の思いで祈った。「やおよろずの神々、諸々の仏様、どうぞ雪を降らせてください。お助け下さい」。

それ以上何をする当てもなく自宅に帰った。空ばかりが気になって落ち着かない。

ところがである。午後2時になった頃だろうか、ふと目を移した窓外の景色に驚いた。なんと粉雪みtainなのがちらちらと空に舞い始めているではないか。気温も急に下がりました。状況が急転回し始めたのである。そのあまりの変化に驚き、感動して身震いした。

時間が進むにつれ雪は勢いを増し、夕方近くにはあたり一面雪景色に変わってしまった。これは案外いけるぞ。夕暮れが深まる中でようやく愁眉を開くことができた。そして、「雪、雪、雪、雪、雪、雪」と、更に弾むような思いを込めて神仏に祈った。

一夜が明けた。16日朝6時。統裁部演習部隊とも青森市郊外の遭難将士が眠る幸畑陸軍墓地に集合した。外はまだ暗かったが域内は煌々たる照明に照らし出されている。この墓地での積雪

量は約30cm。明け方の寒さは厳しい。しかし、まさに打ってつけの出陣の舞台が出来上がっていた。完全武装の演習部隊は、慰霊のラッパを吹奏し、黙して語らぬ墓標に向かって今回の演習の必成を誓った。

天候は荒れることもなく、演習部隊は雨々と小時、大時を登り行進を続けた。昨日は砂塵が舞っていた後藤伍長の銅像付近の積雪は1・5m、雪洞を作るのには十分な量であった。

蠟燭の光に淡く照らし出された雪洞の中、寝袋に入り静かに目を閉じると、いろいろな想念が頭の中を駆け巡った。非命に倒られた将士の靈魂がまだこのあたりを迷い徘徊されているのではなからうか。それとも、70年ぶりの後輩たちの挑戦を歓迎し、温かくエールを送っておられるのではなからうか。雪の冷たさを背中に感じながら昨日から今日までの八甲田山の自然の激変を、こわさを改めて思い直していた。

翌日は、更に好天が続き、部隊は順調に雪原の行進を続けた。正午頃、田代平に達し、そこで部隊を展開させ最後の突撃をもって演習は終了した。りゅうりようたるラッパの音が八甲田山に届(こ)だま)した。

部隊は、その後更に南下して増沢を経由して三本木(現十和田市)方向に抜けた。

当時との自然条件には大きな違いはあつたものの、青森市側から三本木方向への作戦ルート確保という先人達が描いていた70年来の宿題には、一応の決着が付いたと言えよう。

追記・嘘のような話と思われるかもしれないが本当のことである。あれからずーっとこのことは書き残しておきたいと思っていた。今日やっと実現することができてほっとした気分である。今から35年近く昔のことなので、一部記憶違いなどがあるかもしれないが、大筋に間違いはないと思っている。(平成18年7月27日)

編集委員 今年(平成31年(2019年))なので、遭難事件は1・12年前の出来事である。昭和47年に実施した訓練を13年前に思い起こして書かれたものを、『偕行』の記事を読んで思い出し、送ってきたくださったので、『偕行』が繋ぐ縁と言えらるだろう。先輩の方々も、『偕行』の記事を読まれ、後輩たちへの参考になる書き物があれば、是非、ご投稿していただきたいと思います。

山に届(こ)だま)した。

部隊は、その後更に南下して増沢を経由して三本木(現十和田市)方向に抜けた。

抜けた。